越中國神通川舟橋

〔千種日記〕舟橋の驛に到る、此川に舟橋あり、小舟四十八艘を以ていとなむ、川の兩岸に指出たる岩あり、其岩に鎖をかけて舟を係て橋とす、此舟橋の長きこと百十二間あり、

〔加越能山川記〕越中　神通川

神通川は、越中新川郡、婦負郡の間に有り、北陸第二の大河なり、第一は越後の新保川也、〇略中 番山の北舟橋有り、舟數六拾六艘程入、下東岩瀨の湊に舟渡貳艘在、其上下には舟橋也、舟數百三十四艘、水高時は百五拾より百七八拾艘入、

〔和漢三才圖會三十、四船橋〕艆〇略中

越中富山神通川、其幅凡二百丈、比舟五十二艘爲橋、舟與舟之間二丈許、用大鐵鋒繫合、布板於上、

〔遊囊賸記二十四〕神通川ハ富山ノ廓外ヲ流ル、鐵鎖ヲ用テ船六十二艘ヲ係グ、

〔舟橋方古書寫〕承應三年之御書物左之通

今月廿六日之書札到來、仍神通川水出候樣子、別紙書付入御披見候處、箇樣ニ舟橋切殊ニ水主死、乘舟四五艘流候由、何茂油斷故と被思召候、

一舟流候程之儀ハ、前廉ゟ水之樣子ゑれ可申候處ニ、ぜうをもあけ置不申義、何も前日ゟ相詰被申間敷と被思召候、

一かこ流候義、第一人之命たいせつ成處、箇程之仕合、沙汰之限旨御意候、可被得其意候、恐々謹言、

八月廿一日　　奥村因幡　澤田玄蕃

角尾五次衞門殿　富田三郎左衞門殿　田邊作五左衞門殿　山崎早左衞門殿

〔東遊記二〕九十九橋〇略中

越中の神通川は富山の城下の町の眞中を流る、是又甚大河にして、東海道の富士川抔に似たり、水上遠くして然も山深く、北國のことなれば、毎春三四月の頃に至れば、雪解の水殊の外に增來